

放送人の会

No.69
2015.3.13

〒102-0094 千代田区紀尾井町1-1 千代田放送会館 3階 TEL&fax03-3221-0019 Mail info@hoseiin.com
発行 一般社団法人・放送人の会 会長 今野 勉 編集担当 伊藤朝浩 (広報委員長・編集長)、鈴木典之、逸見京子、前川英樹 (HP担当)、松尾羊一 事務局 佐藤真美子、須斎恵美子

いい番組を作って放送するだけでいいのか

放送人の会 会長・今野 勉

◆同時代と歴史
ノンフィクション作家・保阪正康氏による毎日新聞連載の「昭和史のかたち」の、今年最初の回(1・10)は次のように始まる。

「戦後70年、好むと好まざるとにかかわらず太平洋戦争の内実は(同時代史)から歴史へと移行していく(中略) もともとは極東の一小国が、昭和20(1945)年8月には世界60カ国余と交戦状態にあったというのが同時代史ならば、この小国の敗戦により帝国主義的国家は壊滅の道を歩み始めたというのが歴史上の解釈である。」

その歴史上の解釈を誤らないために史実の実証性が求められるとして、保阪氏は、昭和18年の神宮外苑競技場での学徒出陣の壮行会は同時代史としてはよく知られているが、それだけの学生が出陣したのかは解かっていないことを挙げ、元学徒兵有志7人が定年退職後、執念をもって平成12年に陸軍学徒兵の記録を作成したことに敬意を表している。この記録によつて、同時代史を歴史にするための史実を私たちは持つことが出来たのである。

◆「夕張アーカイブ」へ

そのことを頭に入れて、私は、2月下旬、北海道夕張市で催された「夕張アーカイブ」

のシンポジウムに参加した。夕張市の地域史資料調査室のOさんが収集した数百年の炭鉱映像を市民に見てもらおうというのが「夕張アーカイブ」の目的である。かつて炭都夕張と言われたこの町に、往時をしのばせるものは殆ど無い。炭都の歴史と文化と生活を伝え継ぐには、残された映像に頼るよりほかない。

と同時に、同時代史として記録された炭鉱の映像を「歴史」にするためには、研究者や市民による検証が必要であることを、私は収集された一本の映像記録から教えられていた。

私が居た登川という炭鉱の創業時の大正5年に撮られた映像記録がそれである。恐らく東京に住んでいたであろう多くの経営幹部が、盛衰した炭坑住民に迎えられて汽車から降り立つ場面が記録されているのだが、5、6人の幹部は妻と息つれる和装の女性たちを伴っていて、彼女らを坑口まで案内していくのである。経営幹部が日本近代化の最先端をゆく炭鉱事業に携わるのを誇りに思っていたことが見て取れた。この時から、太平洋戦争中の中国・朝鮮からの強制連行による労働者調達とその人たちの虐待まで、15年とかがかかっていないのである。「歴史」が問われている。

「夕張アーカイブ」の意義は誰しも認めるところであるが、Oさんは難題に直面し

ていた。多くの同時代史的炭鉱映像は、テレビ局制作のテレビ番組である。そのテレビ番組を地元市民や、わざわざ夕張まで来てくれる外の市民に見てもらおうと思つても著作権問題にぶつかつて公開がままならないのである。

夕張は財政破綻自治体で、アーカイブの運営費は出ない(実は私も東京からの航空運賃と宿泊費は自前であった)。

◆いい番組を作つて放送するだけでいいのか

同時代的記録映像が作られた時、多くの地元住民に協力してもらつたはずなのに、放送が終わつてしまつた番組は「著作物」と化し、協力した地元住民はまったく利用出来ないことになってしまうのだ。私は制作者として問われている様な気がした。「あなたたちは、いい番組を作つて放送するだけでいいのか」と。

問題の核心には、私たちは、放送された映像を公有のものとするアーカイブを持つていないことがある。しかし、アーカイブが出来るまで待てない人々がいる。今、炭鉱映像を見たい人々がいる。その人々のために私たち(制作者やテレビ局)は、何をすべきか。

とりあえず私が相談されたのは石炭博物館で上映されている入場者向けの映像のリニューアルである。20年も前に作られたものを今上映しているという。さて、どうするか。

放送人グランプリ下馬評座談会

恒例のグランプリ下馬評座談会をお送りします。今年はグランプリ合わせて大山勝実賞が贈られますので、それも合わせてノミネートの参考にしてください。

【総論的に】

X まずNHKのことだが、会長の初井は結局やめないうね？

Y 絶対やめない人だと言われている。任期は3年。

Z 経営委員会はクビを切る権限はあるがそこまではいかない。

X 「ニュースウォッチ9」の大越健介、井上あさひが昨年夏頃からおかしい。牙えがみられない。

Y 7時のニュースはコンパクトだから自立しないが、スペシャルもおかしい。心温まる番組は出てくるが、政治、経済についてどう伝えるのか。いま、戦後70年目の節目だ。その時期なのに時代に引く番組が1本もない。それは経営委員会ではなく、任命者のせいだ。

Z 官邸の恫喝、情報統制は凄い。NHKだけでなく各局そうで、すべての番組にそして新聞、雑誌にも絶えず注文がくる。それは世襲保や世耕弘成といった個人ではなくシステムでチェックしているからだ。恐ろしい時代になった。

X 新聞の首相動静をみると新聞・テレビの幹部職とよく会っている。読売などは会長が社長が何度もサシでメシを食っている。

首相がこんなにマスコミの幹部と食したことはかつてなかった。

Y 初井会長は官邸から電話がかかってくる。「こんな電話がかかってくる」と下にすぐおろす。NHK会長に国会議員や官邸からいろいろ言ってくるのはこれまでもあったことで、元朝日新聞の野村会長は「それは私にお任せください」と一切下におろさなかった。初井は嬉しそうに下におろす。

Z かつて自民党のある派閥と組んだ会長があったが、いま自民党は大政翼賛会だ。安倍は皇国史観の右翼学者とつながっている。

X TBS「報道特集」の金平は賢きぎりぎり逃げていたようだが、危ない気もする。テレ朝・古部の後は誰がやるのだろうか？

Y 噂は聞いているが、どうなのだろう？

I am not Abeと言った元通産官邸の古賀はやめることが決まった。

Z 「報道ステーション」は裏をとっていないとかこまかいミスがあったりして何度も謝罪しており、だらしないうところはあ

るのだが、この1年間、時代に物申したという点では評価したい。古館を含めて賞の対象と考えていいと思う。

X 個々の番組では「クローズアップ現代」が光っていると思うが、集団的自衛権や特

定秘密保護法など政治的な問題に大切な時に触れていない。いくらスタッフがしっかりといても政治部や経済部が動かないとしようとはさられない。「報道特集」は集団的自衛権をきちんと取り上げている。

Y 「クローズアップ現代」は賞の対象に推したい。いろんな社会現象については変なドクメンタリーよりはるかにいいところを衝いているが、ややこしい問題に触っていないのは残念だ。

Z ギャラクシー賞の選考対象はいつも「Nスペ」が多すぎるのだが、今年は「漂流社会」の1本だけだった。老人問題を扱った番組は多くて、先日はBSと9時からと両方やってた。老人問題といっても社会問題ではなく若返りとかほけないためにとか社会的、政治的ではない問題を扱っているものが多い。

X 「消えた子ども」は国会で少年非行とセットになって問題になっていた。1000人くらいの子どもが消えているのだが、日本のシステムは事件が起こらないと機能しない。しかしNスペの追求の仕方も甘い。災害復興予算にむらがつて利権をあさる実情を追究した「追跡 復興予算19兆円」のような日本の国家体質をえぐるようなものがない。

Y 2030年を予測した5回連続の大型番組があったがCGなど制作にお金がかかっている割には物足りなかった。

Z 今日の朝日新聞で池上彰が「皇太子が憲法について、平和憲法を守るべきだ」と

言ったことをメディアは見落としている」と書いているが、単なる見落としでなく情報統制の結果だろう。

X 皇后の話も肝心なところを出していない。両陛下はベリリニュー島へヘリで行ったのに。

Y いわゆる君側の奸だらけなのだ。

Z いまネットでのパッシングはひどい。先日のイスラム国の人質問題で政府対応が遅いと批判すると「それはテロリストを利するものだ」とネット右翼の書き込みが殺到する。論理的でなく「叩け」という指令にしたがってやたらに叩く。

【ラジオ】

X ラジオ系委員が大暴入会したのでラジオの現状から始めよう。

Y ラジオはいろんな動きがあるが、各局ばらばらで局間の対話が難しい。この秋からFM補充免許がおりる。これで都市型難聴はほとんどなくなる。これまでラジオが聞かれないのはいろんな理由があるが、ラジオ自体が難聴地域に置かれた条件電波であった。今度東京地区ではTQ1が90メガ以上の帯域での補充免許がおり聞きやすくなる。問題はこの帯域を聞くためには新しくラジオを買わなくてはいけない。テレビの1〜3チャンネルが聞けるAM・FM併用ラジオは電波が不安定だ。いま、パナソニック、東芝、ソニーが新製品を準備中で、量販店に行くと試作品が出ている。卓上型・名刺型などだ。

最近になって70年代の深夜ラジオを知っている世代が聞き出して少しずつ話題性が出てくる。形を変えてラジオが復活するのかが、ラジオ・トレンドがいまの情報社会の中で地位を占められるのか、正念場に来ている。

Y 先日、電通が広告費の統計を発表した。インターネットの伸びが顕著で1兆円を超え、紙媒体は落ちているが、ラジオは落ちなくなった。低空飛行とはいえず水準を保っている。

Z 個々の番組ではTBSの「セッション22」に注目している。パーソナリティのラジオはいわば語り部で、聴取者からの葉書やメールなどで地域密着のほんわか番組を作ってきた。それはそれでいいのだが、やはり言うべきことは言うというラジオ本来の使命に戻らねばと思つた。

X ラジオは朝が面白い。森本、高島などTQは朝にエース級を投入している。テレビの朝番組と違って二つ一つのコーナーが広く、専門家に十分喋らせる。

Y 曾野綾子問題を取り上げたのは「セッション22」だけだ。萩上チキが1時間、彼女に言い分を十分言わせて進めるのだが、対決姿勢、問い詰めるというのではなく、新しいクールな進め方だ。曾野綾子は差別と区別は違うとかべらべら喋るのだが、萩上にとまどき質問されたんだん行き詰まる。萩上は発信局情報の統合と言っているが、その場で結論を出さなくてもいい、あるまじまりのある有権情報にすればいいと考え

ている。

Z TBSの土曜の深夜のパーソナリティ菊池成紀もいい。

X パーソナリティも地域密着のほんわかタイプだけではすまないぞ、と各局が考える時期にきた。

Y NHKの夕方は最近話のうまい専門家学者が出る。先日はアリの話を聞いたが東京の小さな公園に何種類ものアリがいていろんな生態を観察できると実に面白かった。

Z 朝の「すっぴん！」は金曜日の高橋源一郎が面白い。

X なんといっても芸術祭大賞をFM局としては40年ぶりに受賞した『鉄の河童』（FM福岡）の企画・音楽・編集を担当したフリーディレクター大塚和彦さんの活躍が抜きん出ている。北九州と空を結んで震災で家族を失った少女と鉄鋼マンの交流を描いたラジオドラマで、被災地の外から東日本大震災を描いたのが秀逸。

Y 大塚さんは6年前に「聞こえない声く有罪と無罪」でギャラクシー大賞などを受賞、放送人グランプリでは奨励賞を差し上げた。その後もラジオドラマ作りや脚本家のギルドなどを設立して、大きく花開いた。

Z 対抗馬としては、江戸時代の農民一揆を若者の音楽・ラップに乗せてラジオドラマ化した『風の男 B.U.Z.A.E.M.O.N』（南海放送）だろう。

Y 田中和彦南海放送社長が、自ら脚本を書いて話題になっている。田中社長が長年にわたり、地元を掘り起こしながら

ラジオドラマ・ドキュメンタリー作りを続けてきた成果だ。

X 今年度は特に民放のラジオドラマに優れた作品が多かった印象がある。20代の女性ディレクターが初めてラジオドラマ制作に挑んだ『婚活パスは、ふるさとへ』（山梨放送）も楽しく聴ける作品。しかも番組のスポンサーになった山梨交通が、なんと実際に婚活バスツアーを実施して大人気になっているという。ラジオから社会現象が生まれた点を評価したい。

Y 山梨放送にはこれまで名前を聞いたことのない風土病を究明する興味深い番組があった。

ところで、ラジオドラマといえはNHKだが……

Z ううん。あるベテラン脚本家の方が「脚本がつまらないドラマが増えたわね」と嘆いていた。確かに民放に比べれば役者も音楽も良いし、数多く作っているから完成度は高く安心して聴ける。でも、いまませこれを作して放送するのか、テーマ性が弱い。新しいリスナーを呼び込もうとするパンチ力に欠ける。

X ドラマは不振でもNHKのドキュメンタリーには新しい息吹きを感じないか？

Y テレビと違って、これまでNHKラジオにはなぜかドキュメンタリーが少なかった。それが今年、芸術祭に2本参加して『語り出す被爆遺品』69年目に明らかになる『真実』(BHK広島放送局)が優秀賞を受賞した。広島平和記念資料館の学芸員が、被

爆した一台のピアノにどんな物語があったのかを掘り起こしていくのに密着追跡した。足で稼いだ稼ぎこたえのある力作。

X NHKの地方局には、ほとんどドキュメンタリーを作ってほしい。そもそも優れたテレビドキュメンタリーやドラマの演出家の故・吉田直哉、相田洋、佐々木昭一郎……みんなラジオドキュメンタリーで素晴らしい作品を作った人ばかりだ。

Z 民放ドキュメンタリーでは、東海ラジオの秋田和典ディレクターが熟練の技でいい味を出している。今年も日本一客の入らない常設寄席で有名な『大須演芸場盛衰記』笑ってさよなら『公演中』に家賃滞納による明け渡しの執行官が、演芸場に突入してくる場面はすごい！

Y 『花は咲けども』ある農村フォークグループの40年(山形放送)も記憶に残るいい番組だった。山形県の農民らで作るフォークグループ「影法師」が作った歌「花は咲けども」は、NHKの震災復興キャンペーンソング「花は咲く」には好き嫌いはあるが、あまりにも過剰な同情感と感傷性を巧みに風刺していて深く考えさせられるものだった。

Z やはりラジオはローカルにこだわって掘って掘って、そこから時代の普遍性を描き出していく、そういうメディアだと改めて感じさせられた。

X ラジオはコストのためもあるが7割以上ナマだ。それは電波メディアの基本だ。

Y FMのピーター・バラカンの番組も面

白い。

Z 「大沢悠里のゆうゆうワイド」が7500回を越えた。1日4時間半生放送での記録は評価していい。前の番組の森本毅郎と番組の変わり目で会話をするのだが、この回数だけはかなわないと森本が言う。

X あれと荒川強啓がTBSはいい。その前の赤江玉緒も悪くないが。

Y 放送90年というがそもそもはラジオだ。それにしてもラジオ現場の声が小さい。長谷川修(TBS)ぐらいて、ラ・テ欄関係者はもつとラジオの話題を追ってほしい。

【バラエティー・教養など】

Y 日テレが視聴率トップでテレ朝が脱落だが、ミステリーではバラエティーに視聴率は勝てないということか。

Z テレ朝のミステリーは材料が変わらないから。

X バラエティーはお笑いだけでなく教養情報が入っている家族視聴のできる番組がうけている。日テレは教養、情報をきちんと入れているが、それを下手に真似してオンマツなものを作っている局がある。

Y 日テレは伝統的にバラエティーがうまい。えげつないと言われるが突撃取材など取材のルール、マナーに独特のものがあるようだ。

Z 評判なのは「世界一受けたい授業」「行列のできる法律相談所」&イモトの世界番付「秘密のケンミンSHOW」…
X 昨年暮れの視聴者アンケートによるバ

ラエティートップ10は1位がさんまの2

本、2位が「しゃべくり007」、3位「アムトーク」これはテレ朝、4位「月曜から夜更かし」、5位「ザ・世界仰天ニュース」

6位「ザ・鉄腕!DASH!!」、7位がマツコと有吉の対談、8位「世界の果てまでいってQ」、9位がテレ東の「Youtuは何しに日本へ」、10位フジの「ほんまでっか」という結果だぞうだ。

Y テレビマンユニオンの白井さんが「テレビの大阪弁がきたなくなつた」と書いているが、上方の大阪弁からヤンキーの大阪弁になった。吉本のせいだ。

Z 「鉄腕DASH!!」のゼロ円食堂にNHKが車で食材を求めて作る番組「キッチンが走る」はかなわない。「ゼロ円」の食材の条件はきびしく、捨てるもの、ごみとして捨てられるものの条件を完全にクリアしたものに限られる。そこから日本人がいかに飽食民族になつたかが露骨にわかる。DASH島での生活、そしてほんもののラーメンを作るシリーズ、これらのコーナーが面白い。

X 日テレの番組の多くはやらせでもドキュメンタリーでもないバラエティーのドキュメンタリー化としかいいようがない。

Y 「Youtuは何しに」や火野正平の自転車紀行など自然体の取材は高齢者に受けて

いる。

Z 釣瓶の「家族に乾杯」もその典型だ。

X 「サラめし」もそうだ。
Y あれは中井貴一の語りがいい。

Z 深夜のテレ東やNHKの実験的なドラマ

マをみると、ドキュメンタリー風で事実によりかかつて作っている。フィクションにはイメージのちから、構成力が必要だがその力が乏しいようだ。バラエティーでもインタビュの中から面白いものをくみ取ることはしてもプロが作るフィクションの面白くない。

X 「笑っていいとも」ランドフィナーレ」は感動的だった。「笑っていいとも」が終つて一時代の終わりを感ずる。タモリは70年代を背負っていた。

Y 「夜タモリ」は宮沢りえがいい感じだが、まあまあ。それなりの芸人が出て、酒飲みながら見るにはいい。

Z NHKの「日本戦後サブカルチャー史」が面白かった。劇作家・演出家の宮沢章夫が「愛と独断の理論」で10回放送。新宿ゴールデン街の名物飲み屋など豊富な体験が語られた。

X 教養バラエティーなのだ。BSプレミアムの「激石ころころ100年の秘密」もそう、朝日新聞で「ころころ」が連載された後で、こんな読み方ができるのだと新しい発見がいくつもあつた。

Y バリバラの「出生前検査」はバラエティーというよりドキュメンタリーのようなしつかりした作りだ。出生前検査が行われていたらこの世にいなかったはずのダウン症の子がインタビュアーになつている。

Z 「題名のない音楽会」の「教科書から

消えた名曲」は教育的教養番組だ。「ローレライ」「椰子の笑」「庭の千草」などある時期必ず教科書にあつた曲がいまやない。かつての女学生愛唱歌はみんななくなつた。

教科書の委員会が次々新しい曲に差し替えた結果だぞうだ。

X テレビマンユニオンの浦谷氏が「ある日本映画史」で「長門裕之と津川雅彦の場合」という兄弟の役者としての確執を追いかけた。津川の話は単なる善談でなく芸術論から人生論におよび実に深い話だった。放送は日本映画専門チャンネルで一般にはなじみがないが、アーカイブが大事と言われる時代にこうした企画、映画に対する造形の深さは貴重だと思つた。

Y 面白かつたが結局津川のエクスキューズと自慢話だ。長門は死んで津川の一人勝ちだ。しかしエクスキューズと自慢話もうまくやると大変いいものになる。あれでいいのだ。古い映画の著作権をすべてクリアしてインサートしていったのには感心した。

Z 各監督との関わり、監督評も面白かつた。浦谷は伊丹十三、マキノ雅弘の評伝を作っていて、これも貴重な記録だと評価している。

X 日本映画専門チャンネルで放送されたのはテレビの多様化と言ふ意味ではよかつたと思う。

Y 昨年の選挙の後、アベノミックスに対する批判はなかつた。今年になって国会中継をみると非常に面白くなつた。それは一つはトマ・ピケティのせいだと思ふ。「バリ

白熱教室」は昨年7月、ディレクターが企画を通してパリに電話して交渉した。最初は断られたが1か月口説いてやっと口説き落とし、夏休みの末に収録した。彼は初めてテレビチームの前で講義し、「21世紀の資本」が話題になる前、1月から6回シリーズで放送した。アメリカ、フランス、そして日本もリンパサービスとしてよく出てくるが、格差はほんとうに広がっている。

人口が減り、経済成長が衰えると格差は広がる。最近働いて得る収入より資本を動かして得る収入の方が圧倒的に大きくなっている。マネー資本主義の時代になって金融資本に関わる連中が富を牛耳っている。アメリカでは1%の人間が25%の富を所有している。2011年ウォール街を占拠した99%デモはピケティのデータが基になっている。いまや世襲資本主義が始まった。調べてみると日本の国会議員の中の2世、3世は選挙区は地方でも出身校は東京の名門進学校だ。特に安倍政権の中核は2世、3世が握っている。1世議員はさまざまに黒い金を手に入れているが、2世、3世は東京の1等地に邸宅を構え、汚い金に手を出さない。現在一部上場の企業は開業以来というほど儲けていて、労働者の4割は非正規だ。非正規の平均年収は170数万円。それが次世代に影響し始めている。

Y ピケティが来日した時15社がインタビューを申し込んだ。岡田以下の民主党の連中も頭を下げに行った。「パリ白熱教室」はドキュメンタリーでもなんでもないが、

こんな体たらくの時にはどんな力を借りても出口をみいだすべきなのだ。Pは退職した杉浦正明という65歳を過ぎた男だが、こういう仕事は評価したい。

Z 政治家の財産のデータが出たが世襲議員がみんな高位を占めている。地方創生と言うが東京で生まれ東京の学校を出た人間に地方の何がわかるか。

X 池上彰が彼と対談して、日本でこの本が読まれた理由を訊ねたが、ピケティは「しつかり情報を判断して行動を起させる市民を生み出すのに役立つのではないか」と答えていた。

Y 教育投資だと言っている。佐藤優のインタビューでは「100年前も資本主義は格差を作った。そしてマルクスが出たのだが、結果としてみると社会主義も資本主義も独裁者と官僚に力を与えただけだ。政治家がやるべきことは唯一富の再分配だ。特に次世代を育てる教育に金を使え」と言う。しかし日本はOECD加盟国の中で教育投資は下から2番目だ。

Z 「パリ白熱シリーズ」の前にピケティはいろいろ取り上げられていて、Eテレの「WISDOM」では早い時期にマルクス経済学者と竹中が出演してやったがこれは浅かった。「パリ白熱シリーズ」はデータがしつかりしている。部分的にはいろんな学者がここがおかしいと指摘してはいるが、全体としては格差が拡大していることは誰もが認めていることで、アメリカではいろんな動きが出てきており、日本でも国会で

とりあげられた。おそらくこの本を読む人は少ないだろうから、テレビがこの形で提示した意味は大きい。

X 各回のサブタイトルを挙げておこう。第1回、21世紀の資本論、格差はこうして生まれる。第2回、所得不平等の構図、なぜ格差は拡大するのか。第3回、不平等と教育格差、なぜ所得格差は生まれるのか。第4回、強まる資産集中、所得データが語る格差の実態。第5回、世襲的資本主義の復活、19世紀の格差社会へ逆もどり？第6回、これからの資本主義、再分配システムをどう作るか。

Y それぞれの回を表彰対象にするのは無理で表彰は全体まとめてだろう。

Z 非常にわかり易い語りだ。出だしはバルザックの「ゴリオ爺さん」だ。データは税務統計を15年がかりで最近のIT技術を使ってチームで調べた。中国も韓国も格差は深刻で、アメリカは大統領が一般教書で富裕税を課すと宣言した。

X オバマがコミュニティー・カレッジと言いだしたのもピケティの「教育格差をなぐせ」のせいだ。

Y 内田樹が「若者よマルクスを読もう」という本を書いた。ピケティはマルクス主義から遠いが、この本のターゲットは同じだ。

Z 伊東光晴が「これは資本論と全く関係ない」とかいている。

X 市場主義にポスト・ケインズの経済学者が反発していると言ったが、彼らは分

配論をやっていない。ピケティは実態を示して分配論をやっている。富裕税、累進課税やタックス・ヘイブンの禁止などを提案している。

Y 絵本の「世界が100人の村だったら」も富の偏在をわかり易く示したものだ。ピケティは高校のころから天才の誉れ高い数学の大家で統計学的に非常に精緻なデータを示している。数理統計学をMITで講じていたが、こんなことをやっているときではないとフランスに帰って15年間税務統計分析に取り組んだ。

【ドラマ】

X 連ドラが人間ドラマでなく情報ドラマになって、エキセントリックな刺激を競い合っている。WOWOWのドラマは若い人に支持されていて、映画的なドラマだ。「私」という運命について」はギャラクシー月間賞になった。「騎り行く夏」「贖罪の奏鳴曲」「天使のナイフ」「硝子の壺」など若い映画監督の意欲作がどんどん出ている。

Y その典型がTBSとタイアップした「MOZU」の新しい表現だ。

Z 大河ドラマが出来ない。「軍師官兵衛」「花燃ゆ」はどうしてこうなのだろう。

Y 「官兵衛」は少壮時代から晩年の老けまで岡田准一で辛くも持った。

Z 大河もネタが尽きた。平安の源平、織田、豊臣、徳川の戦国もの、忠臣蔵、幕末の英雄捜しが鼻についてきた。例えば徳川ルネッサンスのプロデューサー高屋重三郎

やアイヌの英雄シヤクシヤインとか、琉球のアイデンティティーを掘り下げるとか、ジョン万次郎の生涯など、マンネリ感のない企画を取り上げるべきだ。

X ゴールデンタイム、プライムタイムという区分はいまや意味がなくなった。多くの女性が働いているいま、10時から1時はいまや深夜ではない。1週間に1度連ドラ好きのおばちゃんや「渡る世間は鬼ばかり」を見るときは時代ではないのだ。いまの録画システムは1発の予約で半年分くらいとれてしまう。ネットでドラマの反響をみるとリアルタイム視聴はほとんどない。一応録画しておいて、女子会などで話題になったら録画からつまみ食い視聴をする。連ドラの1話視聴はDVDを購入するのでなく、録画システムで準備されている。彼らに連ドラ、2時間ドラマとの差別観はない。録画の再生はリアルでなく疑似リアルだが、彼らは情報性を自分の中で組みなおして疑似リアルをリアルにしようとするのだ。編成観は変わってきているだろう。

Y 連ドラはスマホ&パソコン画面連動でつまみ食い視聴するものになったわけだ。これとWOWOWの映画的なドラマとの2極にドラマは別れつつある。

Z 週1のドラマは最高でも25%だが、朝のテレビ小説は1週間の合計視聴率を考えるとおそろしい数字になる。ウイスキーが売れ、ある種の社会現象になっている。

Z ニッカの宣伝になるドラマをNHKはよくやっただね。

X 典型的な家族視聴ドラマだからだ。大きな画面のテレビで家族が一緒に見る番組の最期の光景だ。

Y 1週間に1つのテーマを設定し、27週を転がして行く。相当の職人芸の能力がなければできないことだね。

X あの時間男は見えていないはずだが、何故ウイスキーは売れたのだろうか？

Y いや、男も見ています。

Z 樽ごと売り切れ、原酒が間に合わないそう。

X 家族何人かで毎日見るといって視聴形態はやはり見やすいということだろう。僅か15分だし。

Y あの後「あさいち」が受けをやる。あれが視聴家族なのだ。

Z おかげで「あさいち」の視聴率が高くなった。あの受けは家族視聴が常識だとメッセージだと視聴者は受け止めている。

X NHKの木曜時代劇「銀一貫」は新しかった。仇討で父親を失った武士の子が商家に育てられ、寒天屋になるという設定が面白かった。原作がいい。

Y 江戸長屋のセットのリアル感がすばらしかった。

Z 「銀一貫」は榎川善郎の演出。榎川は遊川が脚本を書いた沖浦のテレビ小説でコケたが、岡本太郎を主人公にしたドラマではとんがった個性ある演出だった。

Y 「雲霧仁左衛門」で京都に行った中井貴一が「スイッチインタビュー」(Eテレ)で糸井重里と話していたが、京都の時代劇

の技術はいま伝えないと消えてしまうと憂いていた。「銀一貫」のような若い人も見る番組で時代劇の伝承を伝えて欲しい。

Z NHKは時代劇を若手が作り始めた。

X 「風の峠」は篠りんたろうがPで、いままでのちゃんばらでない時代劇ができた。「ほんくら」(産谷五朗主演)もそう。耐えに耐えてアクションがはじまるという時代劇のパターンとしての運びではない展開を狙っている。

Y しかし「水戸黄門」にかわる民放の時代劇はないものなのか。マンネリであろうと視聴習慣になつてみてしまうもの。「銀一貫」や「ほんくら」にはそれがない。

Y 一連の8・15もののドラマ企画を経て「おやじの背中」シリーズを企画したTB

Sの八木康夫には企画賞がいいのではないかと。

Y 褒めたいのは山田太一さんの「よろしくな、息子」、鶴橋演出の女系クサー「ウエディングマッチ」。

Z 毎年やってほしい。東芝日曜劇場の伝統を引き継ぐ形で毎年あるシリーズになるとやるようなシリーズにして欲しい。

Y 油の乗った作家と役者を集めてやるのだから力のあるプロデューサーでないとできない。八木に頑張ってもらいたい。

X 往年の「東芝日曜劇場」は1時間ドラマの枠で脚本家、音楽家、役者を育てた。あんなスタンスのドラマ枠にならう。

Z 八木はあの企画を通すのに3年かかったそう。

X 大山賞の候補にはどうなの？

Y 大山賞は60歳以下だから対象外だ。

Z フジの「オリエンタル急行殺人事件」は企画賞の対象にならないか？

Y 広島8月の「かたりべさん」はよかった。広島市のかたりべの募集に応じた。若い男女がこれまでの被害者のかたりべがいかに語り難いことを語ってきたかを知って改心する話で、終戦記念のドラマではみずみずしいもので、初心を感じるドラマだった。

Z 「基町アパルト」を作った大橋氏の作品。

X 大橋氏は11月にも「戦艦大和のカラーライス」を作っている。「かたりべさん」は大橋氏の自作だ。

Y H T V北海道テレビがこの10年間オリジナルドラマを作り続けていて最新作が「UBASUTE」。これは報道マンだった海野祐至が脚本を書いて作ったものだ。娯楽で伝説をベースに若者世代と老人ホームに迫りやられていく層との共生をほのぼのと描いて地についたドラマだ。

X 「Nのために」はどうだろうか？ 話題になったが。

Y 淡かなえの原作もそうだが、娘と子と15年後と3つの時間を行ったり来たりで難解だった。孤独な青春を描くのだが連続ドラマでは緊張が持続できない。2時間スペシャルなら惜しい素材だ。

Z 「私という運命について」は原作が直木賞の白石一文、永作博美主演。テレパツ

クの制作。Pは岡野真紀子。岡野は3本ほどヒット作が続いている。台詞が達者なドラマだった。

X 「昼顔」も台詞が達者だった。脚本は井上由美子。ケッセルの小説、フニエール監督カトリヌ・ドヌーブ主演の映画を下敷きにした不倫ドラマ。これもPは三笠玲子で女性。

Y 女性Pでは内山聖子、檀山裕子、磯山晶と3山が有名だが、内山は「ドクターX」、檀山は「金田一少年の事件簿N」「今日は会社休みます」、磯山は「こめんね青春！」を作った。

Z ここ数年、女性のドラマ制作者が充実してきていると思う。女性P、Dの名前を局別に列記してみよう。

NHK (BSを含む) 新井順子、塚原あゆ子、小松昌代、原麻奈、中島由貴、渋谷未来、田川友紀、橋本万葉、袖口三奈子、日テレ 長尾くみ子、大倉寛子、三下絵里子、柳内久仁子、小室直子、細川恵理、檀山裕子、

テレ朝 三輪裕美子、内山聖子、峰島あゆみ、中川順子、中川恒子、浅野由香、工藤里沙、中尾亜由子、木曾貴美子、

TBS 鈴木早苗、前田菜穂、洲江麻衣子、今井夏木、丸尾典子、松本桂子、江森浩子、

テレ東 川村庄子、西口典子、祖父江里奈、フジ 柳川由紀子、中山ケイ子、並木真子、浅野裕美、宮本理江子、樹下由美、栗原美和子、星田良子、三笠玲子、寒竹ゆり、後藤妙子、橋本美実、山崎淳子、豊福陽子、

大賀文子、大木綾子、岡本真由子
X フジの並木真子には「問題のあるレストラン」「最高の離婚」のDだ。

Y 「問題の…」は面白かったし、タイトルがいい。
Z 「残念な夫」もタイトルがいい。こちらのDは男性だが。

X 「ファーストクラス」は沢尻エリカ主演のファッション業界のドラマで、7、8人の女のキャラ立ちがキラキラで、情報を詰め込み、番組の最後でマウンティングと称して人間の格付けをし、その格付けが毎週変わる。前後編あって、前編ではファッション雑誌の編集部、後編でファッション界に入つてというストーリー展開。カット数が多くて台詞が面白い。

Y TBSの「ルーズベルトゲーム」は社会人野球のドラマだ。応援が面白くて東京ドームへ試合を見に行くコア・ファンがいるが、少ない。毎日新聞は昨年度スポーツ人賞でこの番組をスポーツ文化賞に取り上げた。テレビ番組がこの賞を受賞するのは珍しい。社会人野球をよくぞ応援してくれた、との表彰だ。

Z 原作は「半沢直樹」の池井戸潤で、ストーリーはおなじみ時代劇調だが、野球の実技はほんものだ。

X 同じくTBSの「パパとママが生きる理由」は難病もので、難病ものいやらしさがあるかと思つて見たが、台詞の運びは自然で見えしまった。妻が乳癌、追いかけるように夫が肺癌になる壮絶な物語。

Y 「ナイフの行方」は松本幸四郎、今井翼、通り魔事件を起した男と過去のある老人が同居する物語。老人の過去が難解だった。

Z ドラマの最後に石田徹也の絵が数点が出てくる。椅子にも靴にも飛行機にも自分の少年時代の顔を描いた焼津出身の異色の画家で、ドラマではナイフを振り回した少年のイメージとして使われたようだ。

Y NHKの地方局で60周年、70周年を迎えた10数局が一斉にドラマを作ったが、「さぬきうどん饅頭屋」はその中の珍しく小さな香川局が作った。約75分のドラマ。

Z 「復讐法廷」は田村正和が殺人犯、弁護士が竹内結子での裁判員裁判のドラマ。よくできているのだが、Pが昨年グランプリの内山聖子だ。

X 連ドラはTBSとフジが多く、特にフジが力を入れている。「ゴーストライター」「デート」「ファーストクラス」などは話題性のある作りだ。女主人公が多くなっている。

Y 日テレの「今日は会社休みます」は視聴率が高かった。継続はるかがうまくいった。

【ドキュメンタリー】

Z ETV特集はまた頑張っているが、官邸の圧力の前にNスベはつぶれたと思う。「ネクストワールド」はひどい。放射能についても決定的なものがない。

X 未来の科学技術のスゴサをドラマ仕込

みて見せるのだが、文明時評的な主語抜き姿勢に疑問をもった。

X 昨年は少子高齢化問題が年間を通してやられている。なかでも高齢の「認知症800万人時代」、「老人漂流社会シリーズ」のふたつシリーズが重要な指摘を行っている。前者は「行方不明1万人」知られざる徘徊の実態、後者にはNスベ「老後破産の現実」がある。

Y NHKBS1が戦争特番で昨年夏充実していた。8月に放送された「わたしのシベリヤ抑留」遠い祖国へブラジル日系人抗争の真実、「憎しみとゆるしくマニラ市街戦その後」の3本は素晴らしかった。これを全部BS1でやっていることを評価したい。

Z 3本ともテムジンの制作。金本さんが頑張っている。

X 「戦後史証言プロジェクト」が好調だ。話題になったし、切込みが深い。丸山真男については平和論だけでなくニ高大社での庶民大学にも触れていて、幅の広さとやっていることの凄さがわかった。

Y BSプレミアムの「英雄たちの選択」はタイトルがいささか大仰だが面白い。BS歴史館の後継だ。歴史学者の磯田道史がアナウンサーと二人で可会している。昨日は2・26事件で殺された高橋長清を取り上げていたが、先日は国会で反戦演説をした齋藤隆夫をやっていた。人物の選択の幅が広い。

Z 二つの選択肢を示してあなたはどちら

をどうするか、と議論を進めて行く。あのやり方はユニークだ。みんな真剣に喋る。

X いま川口のアーカイブで白黒映像をカラーにする技術が進んでいて、BSで「カラーで甦る第1次世界大戦」をやった。これはコンピュータで計算して現実に近い色を再現したということだけでなく、眠っていた映像、眠っていた人間が動き出ししている。

Y デイレクターは東野良。東大と組み、フランスのチームが参加している。

Z 先日「日曜美術館」で小林清親をやった。清親は明治の夜の風景を版画にしたが、浮世絵のように黒い輪郭線を描かないで黒や茶色や藍などのいろんな色調を重ねている。高木淳さんの「最後の版元」(講談社)によればステイブジョブスは版元の渡邊庄三郎の店で清親の新版画を片っ端から買い占めた。川瀬巴水や清親による明治の東京風景にみる新版画の作業は白黒映像のカラー化に似ている。川口でのカラー化の仕事は時代考証も非常に手間がかかる。こんな技術も評価してはどうだろうか。

Z 「カラーで甦る東京」不死鳥伝説の100年」では関東大震災の炎の色がさまざまだった。

X あのカラー化はもともとアメリカで始まった。アメリカで作った番組が日本で何本か放送された。その技術がますます進んでいる。白黒のわずかなトーンの違いから色を想像するのだが、その技術は日本がいま世界でトップだろう。

Y この技術には大山勝美賞がやさわしいかもしれない。

Z NNDドキュメント「歴史に挑む高校」日韓40年目の修学旅行」は奈良智弁高校と韓国漢陽工業高校との交流、「海を越える修学旅行」のドキュメント。日韓関係にはいろんな波があつたが40年間途絶えずに交流が続いている。

X 戦争ものでは「狂気の戦場ペリリュー」(忘れられた島)はほんとうの戦争の実態を描いたもので、アメリカのアーカイブの映像を使って凄惨な迫力だ。これは後に「BSがドラマにしたがやはりもとのドキュメンタリーの方が優れている」と思ふ。

Y あの島で34人が生き残り、その中の一人がパラオ島を訪れた記録「おじいさんの戦争」(日テレ)がある。いい番組だがトビックスに終わっている。

Z 民放のドキュメンタリー制作者は孤立していてテーマを深く考えていない。

X ペリリュー島の経験ですがその日本軍部も玉砕作戦をやめて、特攻作戦に切り替える。ペリリューは結局全滅で1万人のうち34人が残った。玉砕を重く認めず、徹底して抗戦しろと命じた。その抵抗を教訓に沖縄上陸作戦ではアメリカは徹底的な艦砲射撃、火炎放射機、掃射作戦を行った。

Y 戦後70年特スへの大企画画では「私の街も戦場だった・カメラ映像が語る戦争」戦後70年・千の証言(3・9放送)TB(S)を強く推したい。

Z 原爆や都市無差別爆撃の陰で忘れられ

ているのが村や町、学校や病院などを標的にした機銃掃射による惨劇と犠牲者の存在だ。

Y 戦争末期は空母や硫黄島からグラマンやP51が超低空で突襲した。機銃砲に連動したガン・カメラで撮影された爆撃成果映像がアメリカ公文書館に膨大に残っている。それらを全国に散在する被害地と照合し、当時を記憶する老人や米空軍の生き残りから生々しい証言を撮り、再現映像で補充し再構成した力作だ。

Z 佐藤浩市のナビゲーターに説得力があり、中でも高尾駅(旧浅川)を出た列車が襲われ、疎開途上の姉妹をめぐる修羅場の再現が凄まじい。

Y 「ターゲット・オブ・オボチュニティ」(なりゆきの標的)だった」が、八王子攻撃の当のパイロット(故人)は逃げ惑う民間人を目撃し、引き金は引かなかったが「戦争は地獄だ」と手記に残している。

Z 三陸都市への艦砲射撃も大津波が襲う平和な現代の無差別性に重なる。

X 70年目の8・15周辺では是非このドキュメンタリーの再放送してほしい。

Z NHKBS1の「ワルシャワ蜂起」葬られた真実」はやはり白黒映像のカラー化。蜂起は1944年8月1日なので放送も8月1日だった。アンジェ・ワイダの「灰とダイヤモンド」「地と水道」を思い出す。

X 「知られざる衝撃波」長崎原爆マッハステムの脅威」は衝撃だった。あんな形で爆風の威力が語られたことはない。

Y 長崎があんな地形だったから被害が小さくなったのだが広島ウラニウム爆弾より長崎のプルトニウム爆弾の方が威力は大きい。エネルギー量が1・3倍か1・5倍だ。

Z マッハステムというのは横から地面にそつてくる爆風でこれが恐ろしい。場所によって被害がかなり違う。

X ドキュメンタリーではないが、御嶽山噴火のときのNHKの映像は凄いい。たまたまそこに行っていたのだが。

Y 一般の人のケイタイの映像も凄いい。死んだ人が撮っている。3・11以降災害の映像記録はえらい時代に入った。

X 街中や駅、銀行の監視カメラもそうだが、ケイタイ、カメラによる目撃者犯歴の時代だ。

Z ETV特集「薬禍の歳月サリドマイド事件50年」。あの薬はドイツで作られドイツは現在徹底的に患者のフォローをしているが日本はそこまでやっていない。ヒューマンストーリーだけでなくこうした国の医療制度の欠陥もきちんとおさえている見事な番組だ。

X 体は不自由だが知能は高い。子どものころから周囲の差別したり同情したりするひとを見て来たが、自分に自信があるので僻み根性は乗り越え克服して、自分をもう一つの眼で客観的に見る力を磨得した。それが凄いい。

Y 父親が見つかるがその時は死の淵だ。「結婚します」と報告に行くと父親は「よ

かった、よかった」と喜び、そして2、3日あとに死ぬ。それをきっかけに母親も見つかると母親も2、3年後に癌で死ぬ。母親の死期が近づいたとき病室に泊まり込んで長い話をする。

X NNNドキュメントの「阪神淡路大震災20年 ボランティア黒田裕子 被災地への遺言」は褒めたい。兵庫県知事がベッドの枕元へ行った時の映像をみると黒田さんはホンモノだと思う。

Y 最後骨と皮になって、言葉もかろうじて出るといふところまで追跡したのも凄いし、それを許した彼女も凄い。

X テレビ金沢の「ひきこもりのシェアハウス」は加賀市に最近オープンした引きこもりの若者だけが入居できる一軒家のシェアハウスの1年を追った。

Y 長崎放送の「人間神様」は雲仙の伊福八幡神社で氏子の中から抽選で「人間神様」に選ばれた6人を中心に繰り広げられる催しを追ったもの。神様も周囲も大変だが楽しそう。

Z 同じく長崎放送の「亀裂く諫早湾干拓に翻弄された漁業者たち」。いまや干拓地の農民対漁民の争いではなく、漁民対漁民

の争いが始まっている。あれの最大の問題は汽水域をダメにしたことだ。

X 国はそっぽを向き、裁判所は地裁と高裁で判断が分かれている。

Y テレビ新広島「ヒロシマを残した男」原爆資料館誕生秘話」は資料館創設者・長岡省吾の話で意外に知らない話をたくさん取材して面白。

Z あれを見ると、原爆資料館はなくなる運命だったのだ。鉱物学を学んでいた長岡は被爆地の石をたくさん拾い集め、それが資料館の基礎にもなっている。

X TBSの「未来遺産」の中の「人間とは何だ」は安住紳一郎、松たか子の出演で脳と心の先端科学の世界ドキュメント。その中の小脳の一部がない難病ジネパール症候群の子の診断からリハビリ、立つて歩き、学校に行き、ミニシカルに挑戦するまで、変えられる脳の可能性の8年間を描いたドキュメントが感動的だった。

Y 広島テレビの「山津波 宅地開発の死角」広島土砂災害の教訓」は地元の大先輩さんだけが歴史を知っているが、サラリーマンは昔氾濫したことを全く知らなくて三角状の川沿いの土地にずらりと家を建て

て行く。それを追っかけながら「俺もここに家を買ったかもしれない」という視点で番組は作られている。異常気象の時代に地元のテレビ局が作るものとして悪くない。

Z 毎日放送の「映像14・なぜ私は語り続けるのか」94歳ある日本兵の戦場」はちよつとつらい話だが上中団で官の命令で行った残酷行為を話している。

X 山陰中央テレビの「離島からの挑戦状」くないものはない」は過疎化の続く島根県で唯一人口が増えている隠岐・海士町の話。町長ががんばって教育・福祉のPRをし、都会から数十人が引っ越してきて保育園、幼稚園が満員になっている。特殊な冷蔵庫を作った牡蠣を養殖し生牡蠣を世界に輸出しているし、引っ越してきて新しく漁業や農業をやる人には1年間くらい徹底的に面倒をみる。町長以下町役場もみんな頑張って「やればできる」と地方創生のお手本のような。

Z NHK広島の里山民主主義を書いた井上が海士町を3年ほど前に取り上げているがタイミングは全たろう。出てくる連中がみんな僻地なのにみんな明るく、元気な子供がいっぱい出てくる。都会から来た連中はみんなうまくやっている。

X 鹿児島島の「やねだん」の離島版だ。

Y やねだんはその後大発展で、石波茂大臣が見学に行つたし、あの番組を作った山根さんは九州大学の理事になった。

Z 海士町には高校があるが大学進学率が島根県でベストワンの進学校だ。というのはUターンしてきた大学生などが塾を開き子どもたちに徹底的に教える。それで偏差値トシブになった。そこに彼等は投資する。

X まさに教育投資、ピケティの隠微版だ。

Y NNNドキュメントの「原発再稼働元年」は再稼働への同意の問題を扱っている。行政は地元の同意をこれと言いがレゴが地元なのか。高浜原発に対する京都府舞鶴市の高浜へ4キロの集落、大間原発に対する函館市などは行政区分が違つてからと地元と認められず紛糾している。その矛盾を追っている。

Z 函館は大間から30キロくらいで、函館市役所から望遠鏡で大間原発は見える。番組は整理されてはいないが問題はタイムリィだ。

X 制作は日テレと札幌テレビで札幌テレビが鹿児島、舞鶴を取材している。



櫻部紀夫氏



河野尚行氏



鈴木典之氏



藤久ミネ氏



堀川とんこう氏



前川英樹氏



松尾羊一氏

Y 大間原発は日本発のMOX燃料で、再稼働ではなく現在建設中だ。

Z 原発番組に対してはBPOへの訴えが続いている。川内原発についてTBSの番組、これは編集上のミスがあつてTBSは注意されたが、NHKの放射能汚染ファイル5は原発促進派に訴えられている。専門家16人の連名による非常に技術的なクレームでBPOに判断できまいにない。

X 専門家というのは原子力委、東電、電気事業連など関連の学者、研究者で、持っている汚染データをこれまで出していなくて、放送されたデータがおかしいとBPOに訴えている。変な時代になったものだ。

Y いつからこうなったのだろうか。昭和14年に国家総動員法ができた。何のこともわからなかったが製紙印刷屋がはげした店を畳んだ。印刷工は「白紙が来た」と徹用工にとられて行つた。今のシャッター街に近い現象。日中戦争は泥沼で双葉山の連勝ストップ、愛染かつらの流行のあの時代にいまは気分が似ている。

Z 今日はいくらぐらいで、お疲れ様でした。

座談会出席者 河野尚行、隈部紀夫、鈴木典之、藤久ミネ、堀川とんこう、前川英樹
(書面参加) 石井彰、渡辺敏史

(記録) 伊藤雅浩
日時 2月27日(金) 午後2時~5時半
場所 千代田放送会館3階会議室

第49回放送人句会

◇平成二十七年三月十一日(水) ◇於：赤坂・表屋◇出席：伊藤雅浩、荻野慶人、佐々木光政(初参加)、鶴橋康夫、豊田まつり、新村もとを、西川阿舟、橋本きよし、林備後、堀川とんこう、森治美
◇不在投句：山原ほん太
◇兼題・菜の花、剪定、鳥帰る、衣裳合はせ(業界用語)

大花見衣裳合はせは人童 慶人
地滑りのままそれぞれに菜の花や 康夫
剪定の非情に花木めざめたる まつり
戻りたる谷戸を歩するや鳥雲に 阿舟
春の日や衣裳合はせし役になる 治美
菜の花の地平線から無人へり 視郎
口ずさむビギンザビギン花菜風 きよし
剪定の音して小さき村なりし ほん太
菜の花の沖の岬に海を釣る 備後
上向かぬ防犯カメラ鳥帰る 康夫
車椅子通れる幅に剪定す 光政
菜の花を古紫の傘に三抱へ まつり
鳥帰る妻の名を呼ぶ露天風呂 光政
菜の花の茎をのぼりぬ生命あり 治美
鳥帰る過ぎにし日々を振り向かず ほん太
宮島に朱の色見えて鳥帰る きよし
菜の花や初恋想ひ口ずさむ 慶人
木の芽時衣裳合はせの怪女優 まつり
お茶ばかり淹れてひとりの鳥帰る 康夫

菜の花や子供マラソンかけぬける ほん太
菜の花明りの胸に点る夕べ もとを

剪定す曲率 2メートル 視郎

鳥帰る私は町に残される 視郎

鳥帰るインフルエンザ引き連れて もとを

春障子衣裳合はせのうしろ影 ほん太

剪定や俺も床屋へ行かなきゃあ 慶人

どこやらで剪定の音ホース巻く 康夫

菜の花の間に青き鬼の耳 とんこう

菜の花に肺活量の少なさまよ 康夫

菜の花や土万姓の多き里 阿舟

梅香る衣裳合はせは古右衛門 視郎

鳥帰る北緯五十度線の果て 備後

大御所の衣裳合はせや春炬燵 備後

顔合はせ衣裳合はせと春めける 備後

夕暮れて菜の花光発しけり 視郎

婚列の菜の花道に掛かりけり ほん太

段丘の菜の花一歩海展く 康夫

菜の花や帰りは暮れぬ往診医 とんこう

孫娘に似て花菜咲く まつり
信号は赤その上を鳥帰る 視郎

耳染うすき男の猫背に剪定す 康夫

鳥引くは集団行動北の空 治美

菜の花や土手道を新しき靴で もとを

衣裳合はせ終へし淋しき難の夜 もとを

春の風邪衣裳合はせのはかどらず 備後

菜の花や火の見櫓と近江富士 きよし

いざさらば眼下の沼よ鳥帰る とんこう

五年目の菜の花揺れる福島に 光政

声弾む衣裳合はせに春の色 とんこう

異郷にも山河あるべし鳥帰る ほん太

次回放送人句会

○平成二十七年五月十二日(火) 十八時頃

から

○赤坂・表屋

○兼題・風薫る、母の日、鱈、キャステイ

ング(業界用語、配役、キャストも可)

☆星野高士先生が選者として見えます



いろはに時代劇とその拾参

菅野聖

かくして平岩さんの「成長しないの」とのひとことで、恋に揺られ苦心の全体構成は白紙となった。妻の郁江がありながらのつまりは不倫の恋だから、夜8時台に描くこともあるまいと、自身を納得させた。それにしても「時代小説のヒーローは歳を数えない」とは目から鱗だ。

だが、第一回の「大奥の恋人」はタイトル通り、大奥に關わる殺人事件が起り、探案のため、殿様(根岸肥前守)の命で、お鯉は実家から呼び戻され大奥に奉公し、探案の一端を担う話である。大奥に奉公すると、外に出るのは難しく、文のやりとりも工夫がいる。音信が取れないとなると、秘めた恋は「一気に盛り上がる」。

盛り上げた恋を、「成長しないの」と忘れる訳にも行か無い。そこで、二人の秘めた恋はゆきつ戻りつとし、忍ぶ恋路の細かな心情の揺れを丁寧に描こうと決めた。もともと、具体的な方策は無い。例によって、出たところ勝負の脚本作りである。

脚本家はメインが3人。年齢を書くと、下川博46歳、井上由美子31歳、大久保昌一良46歳である。下川さんが日本、井上さんが7本、大久保さんは5本書いた。残りの1本を38歳の坂田義和さんが書く。

下川さんはNHKでは「武蔵坊弁慶」でデビューし、中学生日記のレギュラー脚本家として活躍していたが、僕は初めての人

だった。なぜ、下川さんだったのかは、よく覚えていないが、彼の脚本家としての体力を信じて賭けたのだと思う。ミニシリーズ育ちの僕には、半年間、49分×24本という量への恐怖があったのだ。しかも準備期間が短い。短期決戦の長丁場なのだ。

もうひとつ、同世代または年下の脚本家と、時代劇を勉強しながら作りたい、と考えていたからだ。

勝手な思い込みだが、下川さんは締め切りを守る人、直しを工夫する人、直すとき良くなる人、そう考えて脚本家のチーフに決める。台詞は固いが、彼は汗の人だった。

夏の盛り、よく汗をかいていた。見かけの汗だけで無く、汗をかいた脚本がいつも上がってきた。時に本線を外れ、謎解きの仕掛けに夢中になるが……。戦友の原稿はワープロ書きだったと記憶する。

下川さんと同年代の大久保さんも、初めての人だった。NHKの時代劇では、82年放送の「立花登・青春手控え」を数本書いている。時代劇は僕より知っている彼を選んだ理由である。「はやぶさ」では、よく芸人や芸事に絡む話に彼に回るようになる。「王道もの」の大久保さんと、秘かに僕は名付けていた。原稿は手書きで、癖のある独特な大きめの字が原稿用紙に躍動していた。打合せの席に着くと、待ちかねたように、構想を話し出す。構成のメモは無く、いつも口立てだった。不器用な熱い人だった。2011年冬、病に倒れる。享年63。若過ぎる……。

この正月も、大久保さんのパートナーから元気な年賀状が届いた。井上由美子さんとは、「はやぶさ」が2回目であった。最初は92年のはじめ、先輩のYプロデューサーから、デッドロックに乗り上げた車発がある、「面倒見てくれ」と頼まれる。タイトルは確か「虫と少年」というようなものだったが、確かな記憶は無い。幼くして母親の実家に預けられた虫好きな少年(小学3年生)が、母への愛を回復して行く姿を虫の生態にこと寄せて描きたいという企画であった。母から見れば、子への愛を回復する物語でもある。

提案者の若いディレクターが自分で書いたシノプシスというかストーリーラインがあった。Yさんは山内久さんの薦めで、脚本家に井上由美子さんを選んでいった。

それから数ヶ月、ディレクターは自分のストーリーが捨てきれず、井上さんは物語の核を見つけかねていた。登場人物は少年と母、祖父、酒屋を営む伯父夫婦、少年の同級生、他に、昆虫好きなオジサンがいた。オジサンの設定が甘く力が無かった。心情が少年に近くて特異な存在って何だろう。

そうだ、あれがやれる、と思いついた。あれとは、89年2月封切りの映画「レインマン」である。

井上さんは若く、輝いていた。そんな彼女に、オジサンさんは知的障害者にしましように伝える。当時は「知恵遅れ」と言っていた。井上さんが頷いて、あとの細かい話が必要が無かった。

話題はキャストに移り、川谷恒三さんの名前が出る。原稿が上がる。井上さんは89分を全6章に分けて、短編連作風に、平仮名で虫の名前を副題につけて来た。「かぶとむし、ありじごく、すずむし、かみきりむし、てんとうむし、うすばかげろふ」

残るは、タイトルである。「一號後、一虫の居所」というフレーズが浮かぶ。「虫の居所が悪い」との否定的な慣用句だが、居所を探しあぐねている母と子にふさわしいと考えて、タイトルを「むしの居どころ」と付けた。

母は原田美枝子、祖母は赤木春恵、祖父は今福将雄、少年は子役の石井肇、叔父夫婦に佐藤B作と金沢環、知的障害者のオジサンは伯父さん(B作)の兄、長男となった。役者は、イメーヅ通り川谷さんの出演がOKとなる。

顔合わせとロケリハが終わると、彼は「NHKは安いから出るの嫌なんだけど、若野ちゃんの企画、面白から出ちゃうよね」と笑って帰って行った。

作品は、平成4年度芸術祭作品賞と第33回モンテカルロ国際テレビ祭アマード賞を受賞した。演出は大加登雅である。

ロケ地は、福島県いわき市久之浜町だった。大震災の津波被害と原発事故から4年が過ぎて、消えた久之浜の商店街は、未だに仮設の「浜風商店街」である。

はやぶさ新人に戻る。平岩さんの叱咤激励、僕へのKOパンチは、その第三弾が用意されていた……。(つづく)

ラジオのページ

ラジオ人生の古希に想つ

（株）東洋エンターテイメント 高田 宏

ニッポン放送を39歳で退職し、ラジオの制作会社を設立し独立した私は、今年古希を迎えました。そんな2015年は古巣のニッポン放送の開局60周年の年に当たります。さらにAM各局が補充放送としてのFM放送を開始する年でもあります。

アメリカのラジオ制作配信会社「ウェストウッドワン」の様な業態を模索しながら、東京・恵比寿に事務所を構えておりますが、またまたその足下にも及びません。

この度、放送人の会（ラジオプロジェクト）に入会した。三塚彬に代え、昨今、弊社が放送局と共に業界にあずかった二つの番組とその概要を「紹介」します。

一つ目は2005年の年末特別番組としてAM各局で放送された『僕たちの高田渡』

2005年4月16日、56歳という若さで鬼籍に入った類希なるシンガーソングライターで表現者・高田渡さん。亡くなる前年の9月、音楽仲間であり友人の小室等さんとのトークセッションを収録し、30分×4週のラジオ番組として10月にニッポン放送のネットワークプログラムとして、AM放送しました。番組は、『Happy Together』友たちだからね〜』。番組の構成は、「存在知の石井彰さんです。その放送から1年を待たずにこの世を去った高田渡さんを呼び、小室等さんが井上

陽水さんに声をかけ、『Happy Together』を肴に、スタジオで「高田渡とは!?」という話して盛り上げました。

それを60分の番組にまとめたものが、『僕たちの高田渡』です。この番組はその年のギャラクシー賞のラジオ優秀賞を頂きました。ギャラクシー選奨委員のコメントに次の文章がありました。

「個人的で普遍的な独自の日本フォーク音楽を確立した高田渡、長年の友人小室等、井上陽水が彼の知られざるエピソードをしみじみと語る秀逸のトーク番組。選曲と自身の濃い語りには感銘。リアルタイムで聴いた団塊の世代へのノスタルジーと、今の若い世代にも通じる反骨のイメージはまさにフォーク音楽の真髄。亡くなってさらにその存在感を示した現代の吟遊詩人高田渡を語り継ぐにふさわしい追憶集を高く評価します。」

もう一つの番組は、FM COCCOLOで2013年4月から7月第1週まで計14回放送された『永遠のザ・フォーク・クルセダーズ〜若い加藤和彦のように〜』です。

2009年10月16日に62歳で亡くなった加藤和彦さんの音楽人生をザ・フォーク・クルセダーズのきたやまおさむさんほか、松山猛さん、高橋幸宏さん、杉田二郎さん、泉谷しげるさん、T.H.E. ALFIE Eの坂崎幸之助さんといった、当時を知る方々の証言をもとにその足跡をたどりました。

加藤和彦さんの、アーティストとして、プロデューサーとして、また時代のトップランナーとしての生きざま・美言を、加藤和彦さんと、同年代の音楽ライター・田家秀樹さんがその時代の熱を伝える音楽ドキュメンタリープログラムです。このプログラムは2013年度民間放送連盟賞ラジオエンターテイメント番組部門で優秀賞を頂きました。

昨今インターネットの普及によって色々なコンテンツに接する機会が多くなりましたが前述した2本の番組をはじめ多くのラジオ番組もネット上で展開し、聞きたい人が自由に接することが出来ないものだろうかと思えてきます。著作権による制約があることは理解していますが、多少の課金制を導入する等の突破口は考えられるのではないのでしょうか。放送は1回だけの「送りっ放し」のメディアと言われていますが、インターネットの時代になった今こそ伝達手段と番組（コンテンツ）は分離して考える時代がやってきたと思います。ネットによる放送のライブラリー化が進むことを強く望みます。

大須演芸場盛衰記

〜笑ってさよなら

東海ラジオ制作部 秋田和典

秀賞受賞となり、2月9日に贈賞式がありました。このような地方の話題を評価していただいた事を大変うれしく思います。

名古屋市中区にある大須演芸場は、地方では珍しい常打ちの畜席で、名古屋の大衆芸能の拠点の一つでした。しかし昨年2月閉館となり、およそ半世紀にわたる歴史にひとまず幕を下ろしました。資料の滞納が閉館の理由でしたが、演芸場の運営については、営業努力や演者についてなどさまざま課題が以前から指摘されてきました。

市民の間でも閉館の話題は注目を集め賛否さまざま意見が交わされました。こうした動きがきっかけとなり番組作りを考えました。落語、漫才など数々の芸人が出演した大須演芸場は満員の客で賑わった時期も「日本一客が入らない演芸場」と呼ばれたこともありましたが、大須演芸場が人々にとってどんな場所だったのか？その盛衰を客観的な視点で描けないかと考え、演芸場を擬人化したナレーションで紹介しました。

軸にしたのは名物席亭を40年務めた足立秀夫さんと落語家古今亭志ん朝さんの交流エピソードです。足立席亭と旧知の間柄の志ん朝さんは救いの手を差し伸べて、大須演芸場で十年間独演会を続けました。その模様はCDブックにもなり高い評価を得ました。演芸を愛するさまざまな人たちが出会う場所が大須演芸場でした。

今回の受賞は、平成24年度文化庁芸術祭でラジオ部門の大賞を受賞した「よみがえる話芸 節談説教」に続く受賞でしたが、

いずれの作品も語芸と関わりのあるテーマとなりました。振り返ってみると、私の子供時代はラジオやテレビで落語、漫才、浪曲など演芸を楽しむ機会は今よりずっと多かった気がします。そうした経験から演芸についての関心が自然に養われたのかもしれない。またラジオは話芸と密接につながっているメディアでもあります。その意味ではラジオの原点を確認する番組作りであったとも言えます。

そして、東海ラジオにはかつて地方局には珍しい寄席の公開録音番組「なごやか寄席」がありました。東西の落語家が出演する人気番組で、1974年から1999年まで続き演芸ファンに愛された番組でした。その音源がライブラリーに残され多くの演目がCD化されました。さまざまな縁があつて1983年には大須演芸場の存続を取材した番組も制作されました。その時の取材インタビューの一部は今回の番組でも使う事ができました。

40年近くラジオの制作現場に関わっていますが、私がこのような番組コンクールに参加できる作品を意識して制作するようになったのは20数年前からです。手がけた番組が連環賞を受賞出来て表彰式に出席したのですが、尊敬する著名なテレビドラマの演出家の受賞とちょうど同じ年度でした。優れた制作者のみならず同じ会場にいた時に、番組を作るこの意義や可能性、ディレクターとしてのあるべき姿勢などを再認識しました。爾来、番組制作につながる

様々な話題や人物に出会った時は、なるべく取材をしていくように心がけてきました。こうした積み重ねの中から実を結ぶことも時にあります。先にあげた節談説教の番組も今回も出演した方々はこれまでに取材経験のある方々でした。

今まで手がけた番組では、「尾張万歳」の継承や名古屋出身の作家城山三郎の詩人としてのエピソードなど、地域の中から掘り起こしたものが多くありました。地元に向けて、その話題をきちんと記録することや地元の優れた人材に話を聞くことは地方のラジオ局の大切な役目です。今回の番組でもお二人の80歳代の出演者がいらつしやいました。とても元気な方々で、大変貴重な話をうかがう事ができました。エリアの中で今しか聞けない話を記録していく、そうした活動が放送内容の充実につながっていくものと思います。今回の受賞式の会場でも他局の制作者のみなさんのすばらしい作品について知る事ができました。これからも機会があれば地域に密着した番組作りを心がけていきたいと思えます。

さて、閉館から一年以上経った名古屋の大須演芸場ですが、新しい座亭と支配人が就任し、建物の改修工事に入っています。今後の運営については、初代林家三平さんの妻でエッセイストの海老名香葉子さんからアドバイスを受ける予定で今年の秋の再開をめざして準備中です。「笑い」は健康にもよいと言いますし、若者にも中高年齢にも愛されるような演芸が楽しめる場所として、リニールする大須演芸場に私も期待しています。

「43年のラジオ人生を顧みて」

永田俊和

先月号発表された電通の「2014年日本広告費」によれば、ラジオ広告費は前年比102.3%と、98年以来16年間続いた右肩下がりにようやく歯止めがかかった感がある。ピーク時にあたる97年のラジオ広告費2,247億円に比べると、底となった13年の同広告費1,243億円は実に55%と半分強にすぎない。まさにラジオが坂を転がり落ちるような16年間だった。

私がニッポン放送（L.F.）に入社したのは、まだまだラジオが上り坂だった72年（同年のラジオ広告費は42.8億円にすぎなかった）。以来、報道部・編成部・営業促進部・営業部・総務部（人事）・ふたたび編成部・制作部を経て、91年から足かけ9年間は、フジサンケイグループと伊藤忠商事などが合弁で作ったイベント運営会社に向。ラジオ広告費が下り坂にさしかかっていった99年からL.F.に復帰、事業部を経て営業促進部で今日に至っている。10年からの営業部の嘱託再雇用期間を告めれば43年の長きにわたるラジオ局人生だった。本年4月末で嘱託期間も終了するが、引き続き営業局との業務委託契約者として営業部に勤務することになっている。

この間、忘れられない出来事は数えきれ

ないが、何と云ってもうれしかったのはベストセラー「アメリカインディアンの教え」（ニッポン放送出版・刊、扶桑社・発売、以下同）をラジオ番組から世に出せたことだ。同書は90年7月初版3万部で発行され、何と51刷・計63万部、さらに文庫化されて39刷・計22万部、累計85万部のロングセラーとなった。また「続 アメリカインディアンの教え」・同文庫版、「続々 アメリカインディアンの教え」・同文庫版、「改訂版 アメリカインディアンの教え」、「新装版 アメリカインディアンの教え」まで次々と発行され、シリーズ累計の発行部数は約128万部を超える。

同書出版のきっかけは当時、平日午前の人気番組「玉置宏の笑顔で今日は！」で紹介された子育てに関する日項目の文章が聴取者の間で反響を呼び、リクエストに応じて繰り返し放送し、カードに印刷してプレゼントにしたことなどから始まる。同番組のディレクターだった野崎幸男氏が私に「口の言葉で元にした文章を『テレフォン人生相談』パーソナリティの加藤謙三先生に書いてもらい、出版化したらどうだろうか」と提案してきた。社会学者で心理学をテーマにした数々の著作もある加藤先生によれば、「日項目は、子育て・子供に対する接し方として極めて理にかなっており、それぞれを深く解説することは意味深い」ということだった。

加藤先生に執筆を進めていただくのと並行して、出版化のための著作権処理などの

問題があった。アメリカインディアンの教えという文章は、もともとアメリカの教育者ドロシー・ロー・ノルト女史が書いたものだったが、当時横浜YMCAにおられた吉水さんという方が訳され機軸に掲載されていたものだった。その時点で原著者の情報は伝わっておらず、北米先住民の間で伝わってきた教えということになっていた。吉水さんを訪ね出版化の了承を得るとともに、その後判明した作者名からノルトさんの権利関係をクリアにしようとしたが、出版時点までには確認できず、本の後書きに経緯を記すにとどめた。ドロシーさんの著書はその後の出版社から出され、こちらもベストセラーになっている。かつては人気バートンナリエイの著書や番組の企画から生まれたベストセラーが次々と生まれていたが、10年近くにわたり売れ続けた出版物は、ラジオ発としては極めて異例であろう。改めて感慨深いものがある。

もう1件、私がかかわった中で忘れられないのは、東京5社ラジオ強化委員会の活動だ。ラジオ広告費の減少の背景には言うまでもなく聴取率の低下がある。首都圏の場合、昨年の10月度にはついに全局平均聴取率が5・8%にまで下落した(月々日6時~24時、12~69歳男女)。これは首都圏ラジオ聴取率調査が現在のようになつた01年10月度の全局平均8・7%に比べて、実に2・9ポイントのダウン。13年間で2/3になってしまったことになる。特に若年層のダウンがはなはだしい。こうした傾向に対しニッポン放送・TBSラジオ・文化放送・FM東京・J-WAVEの5社では、04年から中学生を対象にした「ラジオ課外授業」というイベントを実施した。各局のパーソナリエイが講師を務めラジオの楽しさをダイレクトに感じてもらおうという試みで、1回目と2回目は千代田区の神田女学院、3回目は渋谷区の国学院大学で実施した。聴取率向上にどこまで効果があったかは不明だが、各局のカラーの違いが肌で感じられるとともに、日頃ライバル関係の各局担当者との交流も叶い、私としては作業は厳しいながらも楽しいイベントであった。その後民放連ラジオ委員会レベルで同様の企画が全国規模で開催されるようになった。経費や人繰りなど様々な問題はあがるが、改めて東京5社やAM3局などの規模でも、また試みてもよい企画ではないかと思っている。

た傾向に対しニッポン放送・TBSラジオ・文化放送・FM東京・J-WAVEの5社では、04年から中学生を対象にした「ラジオ課外授業」というイベントを実施した。各局のパーソナリエイが講師を務めラジオの楽しさをダイレクトに感じてもらおうという試みで、1回目と2回目は千代田区の神田女学院、3回目は渋谷区の国学院大学で実施した。聴取率向上にどこまで効果があったかは不明だが、各局のカラーの違いが肌で感じられるとともに、日頃ライバル関係の各局担当者との交流も叶い、私としては作業は厳しいながらも楽しいイベントであった。その後民放連ラジオ委員会レベルで同様の企画が全国規模で開催されるようになった。経費や人繰りなど様々な問題はあがるが、改めて東京5社やAM3局などの規模でも、また試みてもよい企画ではないかと思っている。

日韓国際シンポジウム
日韓中制作者フォーラムは歴史問題をどう超えるか
 日時・3月21日(土) 12時半~17時
 場所・上智大学12号館301教室
 プログラム
 ◇「基町アパート」上映
 ◇問題提起・渡辺浩平(北海道大学)
 ◇パネル討論 大橋守(NHK広島放送局) 河野尚行(放送人の会) ソン・イルジュン(韓国MBC) 首好宏(上智大学) 玄武岩(北海道大学) 司会・鈴木弘貴(上智学園女子大学)

第39回 名作の舞台裏 坂の上の雲

(09~11、13回放送 NHK)
 日時・2月11日(水)~13時半~16時半
 場所・イイノホール
 ゲスト 竹下景子(出演) 藤本隆宏(出演) 西村与志木(制作) 柴田岳志(演出) 司会 渡辺統史(放送人の会)



竹下景子氏

司会 印象に残っていることを一言ずつ... 竹下 大作なのでロケがコマギレでした。いくつかカットを撮って次が何か月後の撮影とかで、その間気持ちキープするのは大変でした。いつもどこかで「坂の上の雲」を考えていました。それが3年間です。時間ばかりでしたが、それにみあう作品が出来たと思います。



藤本隆宏氏

も競争ですからね。あれが初日なんです。藤本 大分弁もまだ出来なかった。西村 本番で食べられなくなるから、ふつうリハーサルでは食べない。しかし藤本さんはリハーサルのときから食べ、数えきれないほど食べた。藤本 15か20は食べた。一所懸命食べた。すみません。

藤本 初めてのテレビドラマ出演です。クランクインのとき竹下景子さん、松たか子さん、阿部寛さんと鈴々たる名優がいる中に入って頭の中は真っ白、台詞が飛んでしまいました。餅食い競争のシーンです。竹下 無理もないわ。お餅ですから、そして津(秋山真之)とどちらが多く食べるか

柴田 司馬さんはこの作品を書くのに10年かかったのですが、テレビドラマではそんなにからかれないと思ってスタッフに入りました。終わってみたら10年かかっていました。それだけの大作でした。100年前のことを映像化するのには思った以上に大変でした。100年前の建物はほとんど残っていない。それを再現しました。原作は明治の日本が世界とどう付き合うかの物語で、舞台は世界中です。この再現も大変でした。蒸気船が出てきますがいま蒸気船は世界に残っていません。CGの新しい技術VFXを使いました。それまで大きく使ったことがなかったのでときどきしながらやりました。

西村 私が「雲」を読んだのは大学生のときで、学園紛争の時代です。議論がない

ので田舎に帰るとやらからしているのを見かねた父親がこの本を薦めてくれました。読んでみると面白くて夢中になり、明治の人の志にうたれました。

「雲」は新聞連載のときから映画化、テレビドラマ化の申し込みが多く、NHKも大河ドラマにと申し込みだそうですが、

司馬さんは「映像化はしない」との返事でした。当時は米ソ冷戦の時代で日本国内も騒然としており、映像化したら自分の伝えたいことが伝わらないとの理由で、映像化はしばらく金庫にしまわれて鍵をかけられた状態になりました。司馬さんが亡くなった数年後奥さんの福田みどりさんを訪ねる機会があり思い切って「雲」をドラマにしたいと申し込みました。奥さんが「どうして？」と聞くので、学生時代に読んで感懐したことを話すと、それから1年後、司馬遼太郎財団で何度も検討されてOKが出ました。



西村与志木氏

柴田 私が関わったのは2002年からで脚本の野沢尚さんと一緒にあちこちにシナリオハンティングに行きました。国内23都道府県、世界は10か国、マダガスカル島では100歳を超えるおばあさんが70のもの

ころバルティック艦隊に出会っていて「女の子にも外に絶対出るな」と言われたという話を聞かせてくれました。



柴田尚志氏

藤本 私はモスクワ、ペテルブルク、イギリスでロケがあり、旅順港閉塞作戦はマルタ島での撮影です。

西村 大変お金のかかったドラマで大河ドラマの10倍くらいかかりました。オーバータイムと言いますが、ふつうドラマの収録は1割増しくらい、90分ドラマなら100分弱を撮って編集します。「雲」でもそれは意識して脚本の段階で時間に収まるようシーティングアップしました。主人公その周辺にしばったのです。お金はかかりましたが計算しめいての費用です。演出は芸員方したかもしれません。始まるとき当時の島会長に「エキストラの人数は気にしなくていい。使いたいだけ使え」と言われました。竹下 私は二人の息子を育て、その二人が日本を背負う人間になって行くわけですが、それよりもなによりも息子達が健やかに育って欲しいと願っています。時代が変わっても母の願いは同じです。お国に捧げるといふ大きな建前があつて、一方で無事を祈っている母親がいる。その母親の心情はこ

覧になった皆さんはおわかりになったと思います。後半は戦争のシーンが多くなつてはらはらしてみており、女優でよかつたと思えました。当時の戦争は敵と面と向かつて対峙して命を懸けて戦うので、いつも胸がつまりました。

サダさんがいて、子どもの世帯ができても元気で帰ってきてほしい気持ちは変わりません。最後は年を取ってみんなに厄介になるのですがその一念は変わらない、そんな役をやらせていただきました。

藤本 明治の軍人、それも海軍軍人を演じるのは初めてで戸惑いましたが、演出家の指示通り、自由で楽観的で、元気で向上心のある男を演じました。ロシアでのロケが多かったのですが、ロシア語だけはつかえるとみんなに迷惑をかけるので、サンクトペテルブルクの町でも歩きながら絶えずテープを聞き進音していました。

西村 日本海海戦はロシア側の旗艦スワロフはマルタ島で撮り、日本側の旗艦三笠は加賀市で、1年くらいのインターバルがあつて撮影し、編集してお互いに撃ち合う画面になっていきます。松山から出てきた真之が好古のところを訪ねるシーンでは新橋駅は上海で撮影、横浜の港は熊本、お屋敷町はワーブ、などアカ所で撮っています。上海の撮影所は昔の上海の復元で市電が走っていますが、真之の時代は鉄道馬車で市電は走っていません。それで上の電線はずし、下の線路は生かして鉄道馬車にしています。

(中略)

司会 日露戦争が終わって真之は帰国しお坊さんになろうとするのだが叶わず、息子をお坊さんにします。まことに小さな国の開化期を迎えた青年たちが坂の上の雲に希望を持って自由にはほたいっていった楽天家たちの物語が35年たったら黄昏の時代が始まっていた。

西村 これから日本はどうなつて行くのだろうと兄弟は話します。これからどんな坂道を駆け落ち1945年の敗戦に至ります。それから戦後復興。いったいわれわれは坂のどのあたりにいるのだろうか、というのがこの作品のテーマでした。

藤本 明治の人がどんな思いで戦争をしていったのかと考えていました。勝って狂喜し、負けて理性を取り戻す。日露戦争は中国の地で行われた戦争ですし、日本人はもっと相手のこと、いろんな国のことを知らなくてはいけない。そして平和な世界を作らなくてはいけないと思います。

竹下 「坂の上の雲」の時代から日本は近代に突入したということ映像でみせてくれるいろんなことを教わりました。近代化は今の私たちの豊かなな生活を作り、同時に近代が作った負の部分も背負わなければならないのが現在です。その中で志を持ち、理想を持って生きるのが素晴らしいことだと思います。このドラマがこれからもいろんな方、いろんな場で見られ、思いが寄せられ、ドラマの持つ意味が深く大きくなって行くことを期待します。

会員名簿

2015.3.13 現在

【あ】相本芳彦 青木裕子 秋田完 秋田和典 秋山豊寛 雨宮望 新井和子 【い】池田正之 石井彰 石井ふく子 石橋映里 石橋健司 石橋冠 磯智明 磯野恭子 磯村健二 市岡康子 市川哲夫 市村元 一色伸夫 伊藤雅浩 井上佳子 井上良介 今井義典 岩澤敏 岩瀬永永子 【う】上田洋一 上村忠 浮田周男 碓井広義 臼杵敬子 内山洋道 宇野昭 【え】江川雄一 江口展之 榎本恒幸 遠藤利男 遠藤ふき子 遠藤雅充 【お】大池雅光 大蔵雄之助 太多亮 太田敬雄 太田昌宏 大西康司 大西文一郎 大野秀樹 大原れいこ 大類啓 岡弘道 岡田晋吉 緒方陽一 岡野真紀子 岡村黎明 小川治 小河原正巳 沖野瞭 荻野慶人 尾田晶子 織田晃之祐 【か】加賀美幸子 各務孝 片岡敬司 勝部領樹 葛城哲郎 加藤滋紀 加藤節男 加藤拓 加藤義人 金澤宏次 金沢敏子 金子登起世 金平茂紀 加納孝夫 川平朝清 鎌内啓子 上安平冽子 亀谷弘美 鴨下信一 川喜田尚 川口健一 河邑厚徳 河村正一 【き】岸田功 北川泰三 北川信 北川祐美香 北出晃 北林由幸 北村美憲 北村充史 木村成忠 【く】楠美昌 工藤英博 久保志穂 隈部紀生 倉内均 倉澤治雄 訓覇圭 黒崎博 黒沢淳 【こ】小池勝次郎 河野尚行 小玉滋彦 児玉久男 後藤和晃 小山帥人 近藤一男 近藤邦勝 近藤晋 今野勉 【さ】斎藤伸久 斎藤秀夫 斎明寺以玖子 酒井美樹男 寒河江正 坂元良江 桜井均 佐々木彰 佐々木敏三 佐々木光政 笹山正勝 佐藤敦 佐藤年 佐野有利 澤田隆治 沢田隆三 【し】重延浩 重村一 重盛政史 静永純一 志津木敏 四宮康雅 柴田昌平 柴田陽一郎 嶋田親一 清水満 志村一隆 下崎寛 下重曉子 白井博 【す】菅野高至 菅野嘉則 杉澤陽太郎 杉田成道 鈴木昭典 鈴木俊樹 鈴木典之 鈴木道明 鈴木嘉一 須磨章 【せ】関佳史 せんぼんよしこ 【そ】曾根英二 【た】高島秀之 高田宏 高橋練 鷹森泉 竹中一夫 武本宏一 田澤正稔 田中昭男 田中秋夫 田中直人 田中則広 田原茂行 玉城朋彦 【ち】崔銀姫 【つ】塚本茂 辻本昌平 土屋敏男 つボイノリオ 露木茂 鶴橋康夫 【て】寺島高幸 【と】東城祐司 堂本暁子 戸田桂太 外崎宏司 豊田由紀子 豊原隆太郎 【な】中尾幸男 中込卓也 中崎清栄 中島僚 中田美知子 永田浩三 永田俊和 長沼士朗 永野敏一 中村敦夫 中村克史 中村季恵 中村耕治 中村敏夫 中村美美子 中山和記 並木章 【に】新村もとを 西憲彦 西村与志木 西ヶ谷秀夫 西川章 仁田豊文 仁藤雅夫 二宮文彦 丹羽美之 【の】信井文夫 【は】橋本深 林健嗣 林安二 原由美子 原田令詞 【ひ】玄武岩 【ふ】藤井チズ子 藤久ミネ 藤村忠寿 【へ】逸見京子 【ほ】星田良子 星野輝一 堀川とんこう 【ま】前川英樹 牧之瀬恵子 松尾羊一 松平定知 松前洋一 松本修 黛りんたろう 【み】三上義智 水上毅 水野憲一 南譲 三原治 三村景一 三村千鶴 宮崎洋 宮川謙一 三宅恭次 【む】村上光一 村上雅通 村上佑二 村田亨 【も】本木敦子 諸橋毅一 門奈昌彦 【や】八木康夫 矢島良彰 藪内広之 山鹿達也 山泉昭彦 山崎隆保 山崎裕 山路家子 山田尚 山田良明 山根基世 【よ】横山英治 吉澤保 吉田賢策 吉永春子 吉村豪介 吉村直樹 【わ】若松央樹 和崎信哉 渡辺浩平 渡辺紘史 【賛助会員】 日本民間放送連盟 TBSメディア総合研究所 融合研究所 日本ケーブルテレビ連盟

新会員紹介

佐々木光政 (ささきみつまさ) 55年6月生。78年NHK入局。59年「トップ交代」(連子市役所でいま)で地方の時代映像祭優秀賞、N特「30万人の大改革」(国鉄分割民営化)リレハンメル五輪特番などを担当。Pとして「サンデースポーツ」のおはようにつぼん「ニュース7」等に携わる。23年震災時の福島放送局長として退職。現在NHKグローバルメディアアサヒビスで「実践につぼん百名山」BS世界のドキュメンタリー」の制作統括。

仁田豊文 (にたとよふみ) 55年4月生。80年長崎放送入局。00年報道部長。テレビ局次長、大阪支社長、東京支社長、ラジオ局長を経て現在NBCラジオプロモーションメディア統括本部長。

新刊紹介

ラジオは真実を報道できるか

〜ラジオフォーラム×小出裕章〜

(有)放送書店・1、800円



拍子裏に記された紹介記事が本書の背景は要を得ているので…

「東日本大震災以降、福島第1原発の報道によってマスメディアへの信頼は大きく揺ら

らいた。そんな中で「真実」を報道し続け高い評価と支持を得たラジオ番組が大阪にあった。「たね時きジャーナル」(毎日放送)である。

リスナー目線の原発報道、特に小出裕章助教による原発事故解説は多くの人々から信頼され、インターネットを通して日本全国、そして世界にも番組の存在が知られることとなった。

残念ながら「たね時きジャーナル」は打ち切られた。だが、その存続運動から、新たな報道番組「ラジオフォーラム」が誕生した。リスナーからの寄付を基金に、マスメディアの伝えない真実、本当に求められる情報を発信するという画期的な番組である。本書ではラジオフォーラム誕生までの歩みを振り返り、ジャーナリズムのあるべき姿、市民メディアの可能性、番組で伝えたいテーマなどを、パーソナリティたちが思いを込めて綴る」とある。

小出裕章助教をはじめフォーラムを形どる出演者たちの具体的な問題提起に傾聴すると、ころが多いが、上から目線でも下から目線でもない、タテ・ヨコ・ナナメのしたたかな目配りで「市民ラジオ」を表現した経緯を記した石井彰の項目から読んでほしい。そこではかつて同じような苦汁から、市民ラジオを構想しては挫折した先人たちの軌跡が綴られているからだ。

放送と通信の融合の先に、見えてきた市民(というより人民)のラジオ(テレビも含め)、放送が存在するからだ。